寄稿

地球尊重の信仰と人新世（アントロポセン）

ラリー・ラズムセン
柳沼正広　訳

1　ゴールデン・スパイク

国際層序委員会は、地質年代の公式の裁定者である。地球の時代区分を表す地図を作成するために、その委員会は《ゴールデン・スパイク》を埋め込む。地質学上の時代（代、紀、世）は、ゴールデン・スパイクに始まり、ゴールデン・スパイクに終わる。そのうちの一つ、中生代白亜紀と新生代暁新世の境界〔訳注・およそ6500万年前〕を示すものは、チュニジアのエル・ケフに打ち込まれている。

国際層序委員会は、2016年に重大な決定を下すだろう。新たなゴールデン・スパイクが、承認されるかどうか。もし、承認されれば、そのスパイクは、〔新生代〕第四紀の完新世〔最終氷期が終わった約1万2千年年前から現代まで〕を終わらせ、すでに《人新世（アントロポセン）》と呼ばれている時代の始まりを示すものとなるだろう。(1)

地球が連続しないいくつもの時代をもつという考えは、ごく最近のものである。最も古い宗教の聖典や、東西の古代文明の古典文献には、地球に生命が誕生する以前の期間については言うまでもなく、単細胞生物

はもちろん、恐竜やマストドン〔象の祖先〕についても、そして人類の歴史の95％をなす狩猟採集の時期についてさえも書かれていない。書かれた記録に留められた記憶は、一つの《世》のものに過ぎず、それは１万１千７百年という完新世後期の諸文明の時期のみである。

このように、宗教にも科学にも哲学にもなじまないことであったが、ジャン・レオポルド・ニコラス・フレデリック（ジョルジュ）・キュヴィエ（１７６９-１８３２）は、彼のパリの化石の小さなコレクションから、我々の世界以前の世界がいくつもあると論じた。彼は１８００年代の初めに「地球上の生命は、恐ろしい出来事によって、何度も掻き乱されてきた。無数の生きた有機体が、そのような異変の犠牲となってきた[2]」と書いている。自然は、破壊的な結果をもたらしながら、進路を変更してきた。キュヴィエは、誰も予想しなかった、周期的に発作を起こす地球の歴史を暴露したのだ。

もし２０１６年に国際層序委員会がゴールデン・スパイクを埋め込むなら、現在の完新世（Holocene、ギリシア語で「まったく新しい」）は公式に過去の歴史となるだろう。地質学者たちの忍耐強い時間の感覚から考えると、これはいい加減な決定ではない。それは、彼らがすでに気候学者や海洋学者などの他の地球科学者と共に集積してきた十分な根拠に基づいて、新たな《世》について決定的な判断を下すということを意味する。

多くの科学者はもう待っていない。ノーベル賞受賞者の気候学者ポール・クルッツェンは、２０００年に行われた地質学者の会合で、我々の住む環境が依然として完新世後期と呼ばれているのを遮って言った。「やめよう。我々がいるのは完新世ではない、人新世（ひとしんせい）だ」。人新世Anthropocene（anthroposはギリシア語で「人間」）は、その直後の休憩時間から盛んに議論された。クルッツェンの論文「人類の地質学」が『ネイチャー』誌に掲載されるとそれは多くの科学誌や人気雑誌でも大きな話題となった（２０１１年の『ナショナル・ジオグラフィック』には「人間の時代―人新世への突入」との記事が掲載され、同年『エコノミスト』でも人新世が表紙を飾る特集記事に）。

地球圏・生物圏国際協同研究計画はすでに判断を下

している。「この惑星は、いま人間の活動に支配されている」と人新世を告げる本を２００４年に出した。「ここ数千年にわたる証拠が、地球環境に対して人間がもたらした変化の大きさと割合は、多くの場合、空前の規模であることを示している。地球システムの現在の働きは、過去のどのようなものにも似ていない」[3]

「過去に似たものがない」とは、この場合、初めて人間の時間が十分な衝撃をもって地学の時間に合流し、これまでにない世界が始まったことを意味する。「それ以前の自然の働きの糸が切れた」。自然が「進路を変えたのだ」（キュヴィエ）[4]。

その一方で、国際層序委員会も公式に動きを見せ、新たな《世》の到来について考える人新世作業グループを立ち上げた。

いまや自然界に対する人間の影響が、産業革命以前よりはるかに大きなものとなっていることは、どこにおいても疑いない。ただ問題は、これらの地質学的な規模の出来事が、継続中の完新世の劇的な発展であるのか、あるいは新しい《世》の始まりであるのかということである。国際層序委員会は、新たなゴールデン・スパイクを打ち込むべきか否か。

さしあたり次の点が重要である。地球はこれまでに、大きく変化するいくつもの時代を見てきたし、これからも老いた星の燃え殻となるまで見続けるであろう。しかし人類文明が存在してきたのは、そのうちの一つの時代にすぎない。我々の期間は、完新世に限られている。すべての書かれた歴史にも、新石器の集落に始まる現代までのすべての諸文明にも、完新世の紋章が刻印されている。紋章とはすなわち、暖かい気候の十分な安定性である。この安定性が、氷河期や逆に極地がぬかるむような時期も含めて、どんなこともありうる自然の傾向性にもかかわらず、生命の勝利を〝許す〟ばかりか、むしろ〝育む〟ほどのものだったのである。[5]

しかし、現在、完新世のその比較的安定した気候が、（予測される）人新世の「不安定な気候」に、明らかに道を譲り始めている。その明確な原因は、決して意図したものではなく、まったく意表をつくものであった。つまり、人類が低質燃料を大量に燃やすことによって、

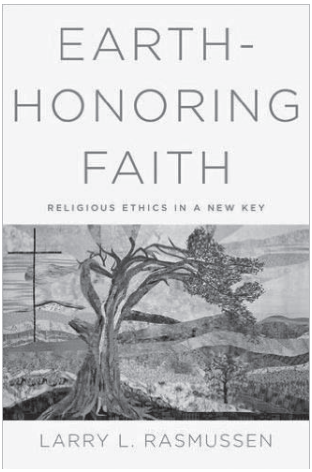
太陽光輻射を制限して惑星表面のプロセスを造り変え始めたことである。我々は、とくに１９５０年から、実際には１７５０年から着実に、この惑星の温度調節器を設定し直し、大気と海と大陸の化学や力学に変更を加えてきた。その結果が、カーボン・スパイク〔大気中の炭素濃度の急増〕である。これが、《加速度的かつ極端な気候変動》といわれる気候の不安定性をもたらしているのである。現在の大気中の二酸化炭素のレベルは、過去80万年のどの時代のレベルをも越えている。[6] 海洋の炭素吸収による海の酸性化が進む度合いは、この８百万年で最も速く、この30億年で見られなかった規模となっている。[7]

哲学的、倫理学的に最も重要なのは、現在の加速度的かつ極端な気候変動、生物種の大規模な絶滅、海洋の酸性化というものが、《人間由来の》地球物理学的変化であり、これまで人間の行為者性（agency）と責任が及ぶことのなかった領域に足を踏み入れてしまっていることである。その変化は、「世代を越えて蓄積し、諸生態系を貫いて凝集し、想定できない未来を進化にもたらすものなのである」。[8] これは人間の影響力と責任についての地殻変動的な変化であり、そのための倫理は既存の書物の中にも道徳理論の中にもない。累積的に人類がもたらす結果は、時間の次元においても空間の次元においても現代人が担える説明責任の範囲を越えてしまっている。もし、人間の責任についての「一つの時代の終わり」と「質的に異なる時代の始まり」を示すゴールデン・スパイクがあるならば、それは今ここにこそ打ち込まれるべきであろう。

2　人類の足あと

もしこの新しい状況が、思考実験でのみ当てはまるのならば、危険はないだろう。しかしこの現実は、日常の習慣の中にも、現行の経済構造の中にも、政治の秩序、法律、輸送、法学といったものの中にも埋め込まれている。どのように朝食を調理し、そのための材料を調達するか。どのように仕事へ行き、帰ってくるか。どんな服を着るか、そのグローバルな供給路はどのようなものか。金銭がどんな目的で、どう動いてい

くのか――すべてがこの惑星の新しい秩序に影響を与える。しかし重要なことは、ナオミ・クラインが次のように述べる膠着状態に我々が実際に直面しているという事実である。「我々の経済のシステムと我々の惑星のシステムは対立している。あるいは、より正確に言うならば、我々の経済は、人間生命を含む地上の様々なかたちの生命と対立している。気候の崩壊を避けるために必要なことは、人間による資源の利用の縮減であるが、我々の経済モデルの崩壊を避けるには、制限のない拡大が要求される。これらの規則のうち変えられるのは一つだけであり、それは自然の法則ではない[9]」。



ラズムセン博士の2012年の著作*Earth-Honoring Faith: Religious Ethics in a New Key*（地球尊重の信仰：新しい調べによる宗教的倫理学）

「自然の法則ではない」のなら、変えられるのは「経済モデル」である。それは、グローバル企業資本主義とその自然搾取的な経済を変容させるという途方もない仕事を提起している。

しかし、こうした堅固なモデルをどのように変えるか、あるいはもう一つの経済的秩序をどう考えるか、という問題に向かう前に、完新世後期あるいは人新世初期の現実を手短に述べておくべきであろう。ここ数十年そして数世紀の人類が及ぼした影響について十分な理解が得られないうちは、深い変容についてのすべての議論は、誤った分析や誤った解決策を生み出す危険がある。

三つの要因が際立っている。

①今や人類が、自然そのもののうち唯一最大の決定的な力である。完新世後期あるいは人新世初期のアントロポス（人間）は、たいていの川の流れを修正し、世界の集水域を変化させてきた。前世紀においてアン

トローポスは、火山や地震や氷河が地形を変化させる以上に、岩、土、風景を造り直してきた。このアントローポスは、今や、この惑星の窒素循環の主要な因子である。このアントローポスは、今、罪のない様々な種をますます速くなる速度で永遠の死へと追いやっている。このアントローポスは、海洋の酸性化において炭素の容量と力学を変化させ、太陽光線の輻射のあり方に変更を加え続けている。このアントローポスは、実際に、大規模な不安定性という文様が入れ墨された地質学的新時代を開始しているのかもしれない。

つまり、人間の足あとは至る所にみられるのである。自然界のすべてのシステムは、人間のシステムに部分として埋め込まれているか、あるいは人間のシステムの影響を深く受けている。これには上空の大気、海洋の底、南北の極地地域など、人間が住まない場所も含まれる。

我々の役割は、自然の境界線が日常的に破られるうちに変わってきた。この惑星の〝住人〟であった我々は、その〝管理者〟となり、[10]一つの種にすぎなかったのに、その専制君主となった。自然の保全さえ、人間の注意深い介入なしではできなくなってきた。北極や南極から赤道地帯まで至る所で人間による介入がなされている今、不干渉や好意的傍観などはもはや不可能なのである。

人類の足あとはどこまで届くのか。エリザベス・コルバートは、人類は〔他の種にも〕共進化をもたらす力であると結論している。「我々は、そのつもりもなく、進化におけるどの道を開かれたままにするか、どの道を永遠に閉ざすかを決めているのだ。他の生き物はこれについてはどうすることもできないでいる。不幸なことに、それが人類が地球に贈る最も永続する遺産となるだろう」。[11]

②自然は、地質時代の推移の上で、その進路を変化させた。2014年9月21日、35万から40万の人々が、《民衆の気候変動デモ行進（Peoples' Climate March）》のためにニューヨーク市街に繰り出した。それは、9月の23・24日の国連の気候変動サミットに対して切迫したメッセージを送るための行進だった。地球全体から先

住民が、先住民会議から国連に送られた宣言に後押しされて参加していた。2頁ほどの声明の中に、「気候変動を越えて　聖なる母・地球における生存へ」とのタイトルの他にも、《聖なるsacred》《聖性sacredness》《神聖sanctity》等の言葉が25も見られた。もし《聖性》や《神聖》自体が主題であったなら、さらに人目を引いたかもしれない。しかし、《聖性》それ自体は主題ではなかった――気候変動を越えて生存することが主題であった。このようにテクストの大部分は、現代的な暮らしとそれが包括するすべてのものから《聖なる母・地球》へという変化をよく表している。《現代的な暮らしとそれが包括するすべてのもの》とは、産業革命であり、何世紀にもわたる征服であり、植民地化であり、《進歩》である。「大気は、もはや同じではない」と声明にはある。「水は、もはや同じではない。大地は、もはや同じではない。雲は、もはや同じではない。雨は、もはや同じではない。木も、植物も、動物も、鳥も、魚も、虫も、その他すべてのものも、もはや同じではない。生命の聖なるものはすべて我々の行動によって消えかかっている」[12]。「《気候変動》を食い止めるための議論をしている時間はもうない。そのような機会は過ぎ去った。《気候変動》はすでに到来しているのだ」[13]

「もはや同じではない」が新しい規範である。これまでとは全く違う地球の時が来た[14]。

③もし我々の新たな世が人新世であるなら、そこに入れ墨された文様は、地球規模での気候の変動しやすさと生態社会的な不安定性と思われる。完新世後期の比較的安定した気候のおかげで農業が興隆・拡散し、紀元前1万1千年頃から現在に至るまで、人類文明が存続できたわけだが、人新世における課題は、地球規模で生態社会の不安定性が「常態」となってしまったゆえに求められる〝文明の様々な移行〟である。移ろいやすい気候のただ中にあって、我々は化石燃料に頼った産業技術文明から、負担が少なく再生可能な力による生態技術文明へと、どのようにして移行するのだろうか。

この『東洋学術研究』のためにできるだけ的を絞って言えば、これまでにないこの時代が、宇宙観や倫理

学にとってどのような意味をもつのか、これが問題になる。もしどんな自然の領域も、人間の善行とも暴行とも無関係には立ち行かず、すべてが我々の行動と選択にかかっているとするならば、地球尊重、地球治癒の信仰は、どのようなものとなるのか。どのような人間観・世界観であれば、また、どのような生き方であれば、現在と未来の世代の人類だけでなく、生命共同体全体――大地、大気、火、水といった生命を生み出す基本要素をも含めて――に対する責任を担うことができるのだろうか。

3　生命の文化への転換

ブディスト・グローバル・リリーフ〔仏教徒地球救済機構〕の創設者であるビク・ボディー師が、枠組みを示している。我々に必要なのは炭素放出を削減したり、すでに空中にある炭素を捉えたりする技術だけではなく、「生命の文化」という新しいモデルと枠組みである、と彼は書いているのだ。それは、我々が今ばらまいている「有害な死の文化」にとって代わるだろう。生命の文化は、異なる経済モデルを含み（先述のナオミ・クラインを参照）、さらにそれ以上のものでもある。それは「世界に対する理解のあり方」であり、「これまでとは違った価値体系」が生きて働かなければならない。この両者は《人間と人間、人間と自然、人間と宇宙の、より統合された関係》に資するものである。人間、自然、宇宙は、仏教でも他のほとんどの宗教伝統でも、《経験の主体》である。この主体の世界は、「企業資本主義による対象化の過程」と鋭い対照をなす。企業資本主義の宇宙観では、人間、自然、宇宙そのものもまた、すべて同じ要素として、すなわち市場社会のためのモノとしてしか評価されない。

ボディーの世界と、グローバルな消費文化の商品化され市場化された世界との本質的な違いはあまりにもはっきりしている。ボディーにとっては、宇宙そのものが「深い主観的な次元を具えており、さらに固有の知性をもち、それによって星屑を惑星へと変容させ、おびただしい数の生命のかたちを生み出し、湿った土くれを感情や思想、理想や希望をもつ意識ある存在に

変容させ、その内に宇宙自身を観照させる能力までももたせる」[15]のである。宇宙はたんに有用なのではなく、生きているのであり、聖なるものなのである。

ローマ・カトリックの御受難会の司祭トマス・ベリーは、ボディーと同じ論点を「宇宙は、主体の交わりであって、対象の集合ではない」[16]と述べて強調している。ベリーに感化され、イェール大学のメアリー・エヴリン・タッカーとカリフォルニア統合学問研究所のブライアン・スウィムに主導されている《宇宙の旅》プロジェクトは、ボディーのであれ、ベリーのであれ、先住民会議のであれ、こうした生きた聖なる宇宙論に発言力と未来図を与えようとするとてつもない取り組みである。[17]このプロジェクトは、映像や、科学者などへのインタビュー、《旅》の教科書やカリキュラム、様々な文化・宗教そして社会の諸部門の関係者による多様なネットワークを通して、その実現を目指している。

私自身の『地球尊重の信仰：新しい調べによる宗教的倫理学』[18]は、宗教的諸伝統と世俗的諸伝統に基づいて活動する社会倫理学者による試みである。これは、ボディーやベリーの試みとも、先住民会議や《宇宙の旅》プロジェクトの試みとも同盟関係にある。またそれは、自然の世界への畏怖と尊敬に、そしてその有限性と復元力とパワーに対する気づきに基づいている。私の試みは、「共感と尊敬と分かち合われた人間性に基づくあらゆる地域の人々の間の結束」において、また「消費文化の貪欲の病に代わる、質素さと満足と抑制の倫理を勧める」[19]努力において、彼らの試みと合流する。

この宇宙観と倫理に内実を与えるために、私はこの試論の残りで二つの道をたどる。はじめに産業技術文明から生態技術文明への難しい様々な移行について述べる。次に、今の時点の歴史における人間の責任と聖なるものについての思考実験である。もしボディー、ベリー、先住民会議、《宇宙の旅》と同様に、惑星の森羅万象を生きた聖なるものと捉えるならば、人新世に対する人間の責任を形成するために何を引き出すことができるだろうか。

地球温暖化によって、北極圏では海氷の厚さが40％ほど減少しているとも言われる。生息域の縮小や氷の融解時期の変化は、シロクマ（ホッキョクグマ）にも大きな被害をもたらしている（2009年８月、photo by Patrick Kelley: from Wikimedia Commons）

4　様々な移行

基礎からの改革と調整が必要とされている。それらは次のようなものである。

観点の移行　もう我々は自分たちを、これまでのように「同じ惑星に生きる様々な種のうちの一つの種」として理解することはできない。現実の変化に応じた別の理解が必要である。そこには、ウェーバーが《脱魔術化》と呼んだ「自然を、人間が利用する資源の入れ物としか見なさない見方」に対抗する、世界の《再魔術化》も含まれている。[20] 再魔術化は、人間の意識に、主体者たちの共同体としての自然、我々が知るうるかぎりの全生命の子宮としての自然、神秘と精神をもつものとしての自然、宇宙のエートスとしての自然を回復させる。

経済の移行　この移行においては、経済とエコロジーが、《エコ・ノミクス》として融合する。エコ・ノミクスは、すべての経済活動を、〔生物と環境を無駄なく調和させるために〕変化し続ける「自然の経済」がもつ

生態系的限界の内にとどめる。そして、生産、比較的平等な配分、生態系の再生可能性という三つの課題を追求する。利益のための成長は、次の条件を満たすときには、あらかじめ排除されることはない。つまり、成長が長期的に見て生態系の持続性と再生可能性にかなうとき、富と収入の大きな格差が生み出す不安定性を増大させるのではなく減少させるとき、地方・地域の様々な共同体と文化がそれぞれの文化的・生物学的多様性を生かし豊かにする能力を掘り崩すのではなく下支えするときである。

エネルギーの移行　これは経済政策と並行している。現在、エネルギーに対する関心のほとんどは、その資源と利用に対するものである。「我々は自分たちがしたいことをするために、つまり人類の必要を満たす経済を成長させ続けるために、十分持っているのだろうか」「我々は、エネルギーに依存せずにやっていけるのか。そうでないなら、それをどう確保するのか」「エネルギーは、どのようにしたら公平に配分できるのか」。これらの議論はすべて、「人新世において、この惑星の気候エネルギーのシステムが命ずる資源とその利用がどのようなものであるか」を、まず問うことなしに行われている。この惑星は太陽から受ける熱を調整して、地球がたんなる不毛な氷の岩とならないようにしている。エネルギー政策の議論は、人類のエネルギー利用が最優先で、それがもたらす影響には後で取り組むことができると想定している（今やその影響には気候変動の帰結も含まれている）。しかし、優先順位一位であった人類の地位は明らかに後退している。《人類による》エネルギー利用は、《地球による》エネルギー利用のうちの派生的なものにすぎない。そして、エネルギーに関する第一の掟は、この惑星の生命を支える「気候エネルギーシステム」の保全である。これは、人類の経済の第一の掟は「自然の経済」そのものを保全することとするベリーの方針と並行するものである。[21]

人口統計学的な移行　この移行においては、人類の数は横ばい状態か、ゆっくりと減少していく。同様に重要なことだが、一人あたりの自然に与える有害な影響を減らして、他の生命と相互に強化し合う関係へと

移行する。今のところ、この惑星を維持するには人類は多すぎるし、人類のうちの多くは豊かすぎる。

政体の移行　民主主義的な資本主義の基本概念を変化させる（民主主義的資本主義が今後も維持できるものと仮定しての話だが）。この移行は「2年、4年、6年といった選挙の周期や、4半期あるいは1年ごとの業績報告といった短期間の視野」から「人類と他の種の未来世代の福祉まで包含する視野」への変化である。この移行はまた、「均衡を図る力としての政府の役割よりも、私有財産とその利用への権利がより基本的なものとされ、富を享受しようとする実質的に無制限の自由を養う社会」から「社会的・政治的・経済的な力を民主化する過程を通して、公共の利益を育む社会」への変化である。その社会では、現在と未来の世代にとって不可欠な財として、大地・大気・火・水などの真に優先すべき共通の財が配慮される。《持続可能な共同体》の観念は、古来の《補完性原理》という規範に基づいている。補完性原理は、経済・環境・統治が、それぞれの土地の共同体や生態域にどれほど大きな影響を受けているかを見定める。その上で、原則的に、補完性は、取り組むべき課題や問題や不安定性に対して最も適切な《全体》はどのようにあるべきかを常に探求する。しかし、それは地方の共同体とその諸特長に対して非中央集中的なやり方で始められる。もしその共同体が基本的な必要や課題にその諸特長を生かして取り組むことができるなら、それ以上のことはなされない。もしそれができないなら、あるいは、できない時と場所においては、より包括的な《全体》を引き出し作り出す努力がなされる。縮小していく世界にあっては、そのような全体は、国際的な協力を頻繁に必要とするだろう。しかし、補完性の原理は常に同じである。すなわち、地方から始め、その場所で手に入るいわば《最も低い》水準の適切な資源で問題を解決せよ。最初の一歩は「その土地の霊に尋ねよ」[22]なのである。

〝グリーン化された〟グローバル企業資本主義の「持続可能な発展」とは対照的に、補完性に基づく「持続可能な共同体」は、次のものをすべて、あるいは部分的に維持し生み出す。すなわち、その地の生態域は人

間の体にとっても基本的なものであるとの見方に基づく、地方・地域の経済的自足性の拡大。その土地の所有者及び労働者の手によって、その地の情報や作物の多様性を生かし、種子や植生や土壌を守りながら生産物を生み出す農業。文化と価値観のグローバルな均質化への抵抗と、地方・地域の伝統・言語・文化の保存。日常生活から聖なるものをろ過して捨て去り、生活をたんに実用的なものとするような生活のあり方に代わる、宗教的生活と聖なるものへの感性の復活。支配的な消費文化とは異なる社会の道徳的資質の回復。知識を含むあらゆるものの商品化への抵抗。地域・地方の環境保全にかかるコストをあらかじめ含めた（内在化した）物価を設定すること。そして、地球憲章の言葉を用いるなら「全人類にとっての聖なる義務」[23]としての生態系の保護と大地を養うことである。

これらはどれも、グローバルな民主主義的共同体の話であって、現地住民保護の地方主義ではない。問題は、グローバル化するかどうかではなく、どのようにグローバル化するかなのである。そして地球憲章の答えは――民主主義的な共同体が民主主義的に到達したのは――世界中の市民の見事なネットワークによる《グローバル》共同体であり、これは惑星意識と電子グローバリゼーションによって可能になったものである。持続可能な共同体の支持者たちは、「発展」ではなくこのような考えをもっているのだ。なぜなら彼らは、諸企業によって統合されたグローバル経済に地球環境を左右させるつもりはないからである。彼らは問う。「地方的、地域的共同体、ときに国家的、そして地球的共同体へと、一連の段階において健全な共同体を生み出すものは何か。そして、地球の求めるものこそが根本的であることを意識しながら、我々はどうすれば健全な経済と健全な環境を両立できるのだろうか」と。彼らは、グローバル資本主義が、さらに持続可能な発展さえもが、めったに問うことのない問いに注意を向けている。すなわち、人類の共同体と文化との必要不可欠な絆とは何か。同様に、人間以外の世界との絆とは何か。そのような基本的な絆が、現実の健全な生き方に対してどのような意味をもつのか。文化的な富とはな

にか。生物学的な豊かさとは何か。それらを他の生命の共同体と共生する場で維持するには、どんな知恵が必要なのか。どのようにすれば、将来の世代に見込まれる必要をあらかじめ考慮に入れた決定ができるのか――こうした問いである。

政策の移行　この移行においては、政策は自然そのものと同様に統合される。気候変動、貧困、エネルギー、食糧、水、生物の多様性の喪失等の諸問題は、この惑星の経済の中で織り合わされている。どれも実際に分けられていないのだから、分析や解決策のためにも、これらを分けることはできない。統合された政策は、自然自体のもつ統合能力のシステマティックな特徴を鏡としなければならない。人間の技術が自然界の技術とマッチしていなければならないのと同じである。「人間の貧困」と「新たな貧しき者としての地球」という二重の貧困化は、ますますからみ合って進行しているゆえに、社会の福祉と生態系の健康が同時に取り組まれなければならない。

宇宙観、宗教、そして道徳の移行　「惑星の健康が第一であり、人類の福祉はそこから派生する」（トマス・ベリー）ゆえに、そして人類共通の善は、大地、大気、火、水といった生命を生み出す共通の財の健全さに依存しているゆえに、生物生存圏全体が、我々の生命と我々の責任が結びつけられている母体なのである。こうして、惑星の保全がすべての哲学者と宗教に共通の召命となり、倫理学の道徳的枠組みも新たな調べによってつくり出される。宗教的哲学的倫理学は、いまや人間という種に固定されることなく生物物理的なものと地学惑星的なものをも包含する。社会にとっての正義は、森羅万象にとっての正義として飛翔する。[24]

5　聖なる余所者たちと深き諸伝統

こうした様々な難しい移行を達成するには、リーダーシップが求められる。また産業文明の一般的な通念や既定路線を越えた地点から考え行動する能力も求められる。このことは我々に思考実験をさせる。〝聖なるもの〟としての惑星の森羅万象の一部〟として自分たちを位置づけるとき、そこから我々は何を引き出すべきだ

ろうか。

まずリーダーシップについて見てゆき、そして指導者たちが自身の宇宙観と倫理に何を求めるべきかに目を向けていこう。

数十年前、ハワード・ベッカーは、歴史の転換点における指導者たちの研究を始めた。そのような転換期においては、いまの完新世あるいは現実になりつつある人新世と同じように、未来が、過去とも現在ともまったく違う何かをはらんで迫ってくる。ベッカーの研究は、この熱く、混み合った、不安定な惑星上の70億から90億の人々の課題に応えたものというよりはむしろ、世俗化に触発されたものであるが、彼が見出したものは示唆に富んでいる。

彼は、最も成果を出した指導者たちは、一般的な通念や支配的な思考の枠組みを維持しようとする者ではなかったことを発見した。このような通念や枠組みを維持しようとする指導者は、自身の成功にとらわれるあまり、まさにその成功そのものから邪悪な問題を生み出してしまった思考様式や制度から抜け出せなかった。だから彼らは「楽園から吹いてくる嵐」〔訳注・ヴォルター・ベンヤミンは「歴史の概念についてのテーゼ」で、クレーの絵「新しい天使」を論じて、「歴史の天使」は過去のみを見ているが、「楽園から吹いてくる嵐」によって、いやおうなく未来へと運ばれていく――と書いている〕に備えることができなかった（気候変動をもたらしている経済を懸命に同じ軌道に戻そうと努力することも、《我々は自分たちが何をしているか知っているし、他に選択肢はない》と思い込む落とし穴の好例である）。

その反対に、最も有能な指導者たちは、ベッカーの言い方を用いるなら「世俗的な社会における聖なる余所者たち」だった。聖なる余所者たちは、その時代の流行からは外れた場所に彼ら自身の錨を下していた。同時に、彼らはそうした諸伝統そのものを見直して新たな展開を始めた。彼らは別の場所に住む者であり、意見を異にする者だったが、社会の変革に対しても、重んじられてきた信仰の伝統に対しても冷笑的であったわけではない。支配的な文化とその神々から、共感しつつ遠ざかることは可能だったのであり、他の道が

選択可能だったのである。聖なる余所者は、預言者たちが知っていたことを知っていた――ものごとは崩壊しうること、しかも崩壊はしばしば起きること、《その後に》新たな創造が起こりうることを。

この余所者の横顔は、他の二種の人々と対照をなしている。一つは、「新たな伝統を奉じるやいなや、古い伝統との結びつきを断ってしまう指導者たち」。彼らにとって、新しいものは古いものに置き換わるものなのだ。彼らは近代的自由を求めてきた。それ以上のものでも、その他のものでもない。近代的繁栄と特権の歓びをもたらす進歩の行進こそが、彼らが必要とし求めたもののすべてであった。

もう一つの対照的な一団は、「古いものを神聖化して固執する指導者をもつ人々」である。彼らにとって古いものは聖なるものであった。彼らは、世俗化の浸食に対する長く厳しい戦いを行ってきたが、影響力を弱め、疎外感を深める結果となった。彼らは家を離れたことはないと思っていたが、家のほうで彼らから離れていった。

これらの二種の人々とは異なり、聖なる余所者は、古く聖なる秩序の価値観や意味、洞察を使いながら、同時に新たな可能性を探求していった。彼らは、彼らの信仰と特有の文化の井戸から深く汲みあげながら、同時に、受け継いだ知恵を鋳直した。この聖なる余所者は、過去が失われると感じてそれに固執する宗教的人間や、近代の使い古された枠組みが未来においても通用すると想定している進歩的な人間中心主義者よりも、地に足がついており、より創造的であるとベッカーは述べている。(25)

ベッカーの言う通り、聖なる余所者の共同体は、持続できる生き方を求める人類の探求を支えてくれるだろうか、その道へと我々が踏み出す前、様々な危険がまだ知られていないときに？　伝統を師として長く従ってきた共同体が、より堅固な足場を我々に提供してくれるだろうか？　我々の立つ足場とは、祖先が彼ら自身の時代に新たな蘇生を求めて古い鋳型を打ち破った業績の上に据え付けられているのだが。聖なる余所者によるこの惑星の保全は、人新世における「産業文

明から、環境を配慮する文明への旅」に対して常に新しい道徳的精神的エネルギーをもたらしてくれるだろうか？

それは、彼らの信仰が、真に地球を尊重し、地球を癒すものであるかどうかにかかっている。

そのような信仰は、人新世における聖なる余所者が利用できる財産へと我々を導いてくれる。それを「深き諸伝統」と呼ぶことにしよう。というのは、それらのもつ時間と文化の広がりは、人類の記録が存在するのと同じくらい広大なものだからだ。神秘主義、預言者的解放の実践、禁欲主義、秘蹟主義、知恵の養成、これらは、全人類的全宗教的な広がりをもつ。それらはときに地球尊重的であったが、多くの場合そうではなかった。聖なる余所者の今なすべきことは、それらの〝地球を癒す〟資質を発展させ、この惑星を危機に陥れている〝地球を壊す〟人類の諸力、すなわち消費文化、功利主義、疎外、抑圧、愚かさなどに対抗することである。このことを大まかに描けば、次のようになるだろう。

禁欲主義の伝統は、精神的豊かさと物質的質素さを重んじながら、自らの規律にしたがって「イエス」と「ノー」を明言していく生き方である。質素な生き方のなかで地球を激しく愛する禁欲的伝統は、グローバルな消費文化に対して新たな選択肢を提供する。欲望の制御と精神の豊かさが、消費熱の世界に対抗する。

秘蹟（サクラメント）**の想像力の伝統**〔森羅万象を神の恩寵の顕現とみなす伝統〕は、すべての物質的な現実（森羅万象）を聖なるものとみなす。この伝統に含まれている宝は、人間には作り出せないが、皆で十分に分かち合えるものである。この伝統によれば、この惑星は「神の秘蹟を分かち合う場」とみなされるであろう。これは、自然をすべて人間だけが使うために売られる商品として扱う現代の習慣に対抗する。実利ばかりを容赦なく重んじる倫理は、自分たちを主人、他の自然を奴隷とみなすものであって、古代の「主人／奴隷の倫理」の現代版である。対照的に、秘蹟の倫理学では、すべての生命の共同体が同じ惑星上の仲間とみなされ、そこでは、大地、大気、火、水という生命を

育む基本要素も確固たる位置を占めている。これら「仲間」の再生と新生を求めることが《エコ・ノミクス》の一部であり、同時に、彼らの要求を考慮するところまで我々の道徳的宇宙は拡大しなければならないのである。

神秘体験が、汎宗教的・汎人類的な経験と伝統の三つ目である。人間自身が《全なるもの》に属しているという〔フロイトのいう〕「大洋感情」は至る所に見られる。地球尊重の信仰が神秘主義に注目するのは、神秘体験には常に新鮮な道徳的エネルギーの類いが伴うからである。超越的神秘的実在への没入が、どのようにしてティックン・オラム（tikkun olam ヘブライ語で「世界の修復」）へとつながるのだろうか。神秘主義者が主張するように世界が主体と主体との交わりであるのなら、そこから自然の扱い方について何が導かれるのだろうか。これらの問いへの端的な答えは、「他の自然からの人間自身の疎外」が克服されることである。その克服をもたらすのが、神あるいは《全なるもの》、あるいは神秘主義がどのような名を付けるにせよ、すべてを包むその宇宙的実在において、あらゆるものが交流するという神秘体験なのである。

預言者的解放の伝統の核心は、正義の実現を焦点とする信仰である。その鍵は、権力の共有であり、生への抑えがたい渇きである。信仰と道徳性の中心とみなされる「生きとし生けるもののための正義」をもって、地球尊重の信仰は、権力の集中から分権化への移行に焦点を当てる。それが、人種、階級、性差、文化的特権による抑圧への対抗手段となるからである。権力に関する倫理を新たに建て直すことによって、旧態依然の構造をもつ「人間を含む自然への抑圧」に対抗するためである。

知恵の伝統は、森羅万象を教師とする普遍的な伝統である。思慮深い人間の責務は、森羅万象が変化しつつ開示してくれる知恵に従うことなのである。知恵は様々なかたちをとっている。教訓的なことわざや物語、謎めいた寓話、徹底的な問いかけ、詩や瞑想、あらゆる種類の儀式の実践、生と死の神秘についての様々な論考などである。知恵を神的なものの女性伴侶とみな

す宗教伝統がいくつもある。身近な道徳教育は、常に知恵の役割の一つであり、それは人間の愚かさに気づかせることでもあった。それは〔自分が陥っている〕道徳的悲劇に気づくことかもしれないが、それがあってこそ新たな出発という恩寵ももたらされるのである。

これら深き諸伝統の流れは、地球の危機を乗り越えるための新たな宇宙観と生き方に、地に足のついた行動と道徳的実質をもたらす。これらの伝統に共通するのは、深遠な相互の結びつきと畏敬であり、仏教徒たちが「相互存在（縁起）／interbeing」（ティク・ナット・ハン）と呼ぶものである。

またそれらに共通するのは、生き生きとした「結合・混合」である。たとえば、多様な先住民の数えきれないほどの実践は、聖なる宇宙とそれに自らが連なる神秘という知恵を伝え、自然と人間文化を対立させることを拒絶している。コンスタンティノポリスのヴァルソロメオス一世は、禁欲主義と神秘主義と機密（サクラメント）主義を組み合わせて、東方正教会の修行者たちを指導している。ガンジーはインドの村落文化から、だれもが知るヒンドゥーの禁欲主義を引き出して、インド解放という目的に役立てた。〔アメリカの〕ドロシー・デイは、戦争と貧困を生み出すものに対して非妥協的に戦ったが、その姿勢は、〔彼女が創設した〕カトリック労働者運動での日常的なミサにおける秘蹟的敬虔とともに育まれたものだった。ティク・ナット・ハンのエンゲイジド・ブディズム〔社会に関わる仏教〕の訓練では、禁欲的規則と神秘主義的瞑想とが知恵と解放の手本に結びつけられている。イブラヒーム・アブドゥル・マティンは、若者たちと協働しながら、ニューヨーク市のオフィス〔ニューヨーク市庁の長期持続可能局〕において、「地球は一つのモスク」と見て、ムスリムの信仰実践を「グリーンな生き方（Green Deen）」〔彼の著書のタイトルでもある〕を体得するものとして再編しようとしている。アメリカ・コネチカット州のアダマー・ファームでは、有機農法と一連のユダヤの精神性によって若い学生たちが訓練されている。合衆国でもっとも大きなユダヤ教環境組織であるハゾン（Hazon）は、ＣＳＡ（地域で支える農業）の農場の最

も大きなネットワークでもある。

これら深き諸伝統を、それぞれの時間と場所の様々な課題にふさわしいものとして再編し練り上げることが《聖なる余所者たち》の仕事である。ここで言及したのは、あまたの実例のほんの一部にすぎない。

コーダ（終わりに）

《歌》は、地球尊重の信仰の一つのモティーフであり、この信仰を「新しい調べによる宗教的倫理」としてイメージする方法の一つでもある。その《歌》は、地球尊重と地球治癒の信仰であるが、決して単一の旋律で表現されるわけではない。その音楽は、数えきれない声によって表現される。すなわち、その土地にふさわしいすべての舞台で歌われるのであり、世界中の信仰と文化の歌を通して響き渡るのである。

地球尊重の信仰が分かち合う歌は、根本的な《いのちへの肯定（Consent to being）》を表現している。《いのちへの肯定》という信頼があったからこそ、人類がそこから離れて生きようとはせず、また離れては生きられもしない場所に、我々の生命を根づかせることができたのである。その場所とは、すなわち宇宙と共にある地球の自然である。また、それがあったからこそ、我々の生命は、ほぼすべての宗教と文化が生み出してきた土壌に根を張れたのである。その土壌とは、誕生と復活の大地であり、死と再生――我が身から灰を振り払う不死鳥――の大地である。《いのちへの肯定》、それは生命の勝利への、その持続と再生への根本的信頼であり、人新世のような類例のない時代においてさえも、それを信じて生きることなのである。(26)

注

（1）この情報は以下のものから。Gayathri Vaidyanathan, “SCIENCE: When did man dominate changes on Earth? A rock-hard question for scientists,” published in *ClimateWire*, pp. 2 -3 of the printout of the March 12, 2015, online version, available at www.eenews.net/cw/2015/03/12.

（2）Elizabeth Kolbert, “The Lost World,” Part Two, *The New Yorker*, December 23 & 30, 2013: 50.

（3）W. L Steffen et al., *Global Change and the Earth System* (Berlin and New York: Springer, 2004), v.

（4）りのりとをグラフで見るには以下を参照のりと。pages 56 -57 of Larry Rasmussen, *Earth-Honoring Faith: Religious Ethics in a New Key* (Oxford University Press, 2013). グラフはこずれも以下から許可を得て用こられてこる。W. L. Steffen, et al., *Global Change and the Earth System* (Berlin and New York: Springer, 2004), Figure 3.66 and Figure 3.67.

（5）"The Holocene," University of California Museum of Paleontology, www.ucmp.berkeley.edu.

（6）Nicholas Kristoff, 'Neglected Topic' Winner: Climate Change, *The New York Times* Sunday Review, January 19, 2014: 11, reporting data from William Nordhaus's book, *The Climate Casino*.

（7）From Vaidyanathan, "SCIENCE: When did man dominate changes on Earth?", *ClimateWire*, p. 2 of printout available at www.eenews.net/cw/2015/03/12.

（8）Willis Jenkins, *The Future of Ethics: Sustainability Social Justice, and Religious Creativity* (Georgetown University Press, 2013), 1.

（9）Naomi Klein, *This Changes Everything* (New York: Simon & Schuster, 2014), 21.

（10）Robert Arthur Stayton, *Power Shift: From Fossil Energy to Dynamic Permanent Power* (Santa Cruz: Sandstone Publishing, 2015), 6.

（11）Elizabeth Kolbert, *The Sixth Extinction: An Unnatural History* (New York: Henry Holt and Company, 2014), 268-69.

（12）From p. 1 of "Beyond Climate Change to Survival on Sacred Mother Earth," made available December 9, 2014, by the American Indian Institute Traditional Circle of Indian Elders and Youth, Bozeman, Montana. The declaration was signed by 51 members of the Indigenous Peoples' Council, representing at least that many different nations.

（13）Ibid.

（14）先の〔注3〕地球圏・生物圏国際協同研究計画からの引用を見よ。W. L. Steffen, et al., *Global Change and the Earth System*, v.

（15）りりでの引用はすべて以下の文献から。Ven. Bhikkhu Bodhi, "Moving from a Culture of Death to a Culture of Life: Preparing for the People's Climate March," Vol. 6, No. 3, Fall 2014 issue of "Helping Hands," the newsletter of Buddhist Global Relief, and obtained online at www.buddhistglobalrelief.org. The citations are from p. 4 of the printed out version. 斜体部分〔邦訳では《》の中〕は原文のままま。

（16）Thomas Berry, *Evening Thoughts: Reflecting on Earth as Sacred Community* (Sierra Club Books, 2006), 17.

（17）以下の文献がりれについての紹介あるいは教材となる。Brian Thomas Swimme and Mary Evelyn Tucker, *Journey of the Universe* (Yale University Press, 2011).

（18）See Larry Rasmussen, *Earth-Honoring Faith: Religious Eth-*

ics in a New Key (Oxford University Press, 2013).

(19) これらは以下の文献中のビク・ボディー師の言葉である。"Moving from a Culture of Death to a Culture of Life: Preparing for the People's Climate March," Vol. 6, No. 3, Fall 2014 issue of "Helping Hands," p. 4 of the printed out version from www.buddhistglobalrelief.org.

(20) これらの語の用法については以下の文献を参照のこと。Max Weber, "Science as a Vocation," in *The Vocation Lectures* (Hackett Classics, 2004). The original, "Wissenschaft als Beruf," was published in Tubingen (1922) in *Gesammelte Aufsaetze zur Wissenschaftslehre*, pp. 524-55.

(21) Thomas Berry, "Conditions for Entering the Ecozoic Era," *Ecozoic Reader* 2, No. 2, (Winter 2002): 10.

(22) 以下の著作のタイトルより。Wes Jackson, *Consulting the Genius of the Place* (Counterpoint Press, 2010).

(23) 地球憲章は以下で見られる。www.earthcharter.org.〔日本語については以下を参照。www.earthcharter.or.jp〕

(24) これらの移行についての記述は以下の自著に基づき、わずかに修正を加えたものである。Rasmussen, *Earth-Honoring Faith*, 77-79.

(25) ベッカーには言及していないが、同趣旨の興味深いコラムがニューヨーク・タイムズ紙に配信されている。Ross Douthat, "The Case for Old Ideas," *The New York Times Sunday Review*, March 8, 2015:11.

(26) 聖なる余所者たちと深き諸伝統についての記述は以下の自著から抽出したものである。Rasmussen, *Earth-Honoring Faith*, Part II, pp. 239-368.

(Larry Rasmussen／米ユニオン神学校名誉教授・キリスト教倫理学会元会長)
(訳・やぎぬま　まさひろ／東洋哲学研究所研究員)